

潜在的カリキュラムとは何か

名古屋大学助教授 浅沼 茂

1991年11月下旬、私たちは、米国カリキュラム学者マイケル・W・アップル氏を迎え、討論会を開催しました。アップル氏は、特に「潜在的カリキュラム」の分析家として知られています。彼は、アメリカにおける経済・人種・性による社会的不平等の問題との関連で分析を展開しています。そして、このような不平等の生成において、学校カリキュラムとそれに付随して生まれる潜在的カリキュラムが果たしている役割が非常に大きいものであることを明らかにしています。

討論会では、特にこの潜在的カリキュラムの問題に关心が集まり、いったいそれはどのような意味を持つのか質問が集中しました。アップル氏の説明では、潜在的カリキュラムとは、学校の公的なカリキュラムとは離れて、あるいは、それに関連して子どもたち自身が創り出す、もう一つの規範なり、価値なりを含む文化です。例えば、子どもたちは、漢字を学びますが、それが、この漢字はどう書くとか、あの漢字はどう読むのかというような内容そのものに関わることであれば、知る喜びとか、世界の広がりに対する喜びというようなものがあるでしょう。けれども、ひとたび、このような漢字の出来・不出来というようなことが他の子どもたちと比べてみてどうかというような問題に入ってくると、この漢字が出来る出来ないという事柄は、全く違った意味を持ってきます。それは、漢字が出来ることからくる自信とかいうようなものではなく、他の人に対する優越感、あるいは逆に、劣等感というようなものにとってかわられます。

このように他者との関わりの中で生まれる個々人の主観的意識というものが、私たちの生活世界の中で、実際に多様に織りなす文化を創り上げています。例えば、どこどこの学校の生徒は、気取っているとか、どこどこの学校の生徒は、派手だと

かいうように、個々人の特性の違いとはなれ、学校の持つ特性についての一般的な評価が自然発生的に生じたりします。それは、俗に学校の評判などと言ったりしておりますが、私たちは、このような評判に対して、学校がそうであるからとか、まるで学校が自分の特性をすべて決めてくれるような気持ちになりました。しかし、それは、学校がそうするのではなく、本当は学校がそうであると信じ込み、私たち自身や子どもたちが自分でそうなるよう形造っていたりします。文化とはこのようにテレビや新聞や雑誌などが形成してくれるのではなく、私たち自身が積極的に参加してはじめて成り立つのです。潜在的カリキュラムは主観的な意識の集合の結果生まれる文化です。例えば、暴走族のような「文化」は、学校文化に対する積極的な反発と自分たちの自発的な手作りの文化への積極的な参加を意味しています。その中には、学校では得られない生への緊張感、独自の言語使用による仲間との連帯感などがあります。また、例えば、子どもたちが積極的に関わっていく漫画文化（最近は大人もそうですが）や、ロック・ミュージックへの熱中など、いろいろな形があります。

アップル氏は、このような潜在的カリキュラムをあからさまに暴き出すことによって、子どもたちが、単純に算数や英語や社会科や理科などを学んでいるのではないことを指摘したのです。子どもたちが学んでいるのは、学校への反発や学校の成績評価に対して喜んだり、悲しんだりすることなのです。私たちがこのようなカリキュラムの存在に気づき、画一的なカリキュラムに対して、個々人がどのような意味づけをしているのかを吟味できるならば、このカリキュラムを積極的に個性化教育の実践の中に生かすことが出来るようにならうでしょう。

《学期研修会報告》

「ミルウォーキーでの教育実践と評価」

【期日】11月24日(日)

【講師】ウィスコンシン大学 マイケル・W・アップル教授

【会場】上智大学

【通訳】名古屋大学 浅沼茂

上智大学 加藤幸次

今日はアメリカ・ウィスコンシン大学のアップル教授をお招きして、主にミルウォーキーでなされている教育実践と評価のあり方について講演、質疑という形で進められた。参加者は事務局のメンバーを含めて21名で、ゼミのような形式で行われた。13:00から15:00という予定だったが、途中休憩も含めて17:00過ぎまで話し合いに熱が入った。先生も腰の具合があまり良くなく、座っているのが苦痛だと言いながらも熱心に話をして下さった。

評価のしかたには伝統的に2つの方法がある。ひとつは厳格なやり方で、ここまでやったのだから、ここまでできなければならないという方法。もうひとつの方向は民主的、進歩的なやり方で、ポートフォーリオといわれる、子ども一人ひとりに大きなファイルを作っていく方法である。前者は標準テストに依拠するものだが、後者はそれと反対の方向で、テストだけで評価するのではなく創造性をもみてとれるものだということである。ファイルの中には技術的な作品、テスト、VTRなどが入っている。これをつみ重ねていって評価

をしていくというのだ。即ち、質を見る評価である。しかし、すべてがポートフォーリオで評価するわけではなく、目的を考えて、何のために評価をするのか、カリキュラム全体にかかわってくる問題であるという話があった。

この後、テストの良い悪いで評価をすべきでないことから、ヒドゥンカリキュラムの話まで議論は及んだのだった。



個性化教育研究発表会から

今年の秋も、私たちの会に属する学校の研究発表会が全国で続いた。うれしい限りである。しかも、本年は中学校でもこの傾向が見られ、時代の移り変わりを感じざるをえない。

全部の学校について紹介することができないのが残念であるが、以下、ここにいくつかの学校の研究発表会の様子を紹介する。

◆緒川小学校(愛知)

10月13日(日)

強風の中で、第13回「おがわっ子フェスティバル'91」が行われた。公開されたのは初めてである。

昨夜遅くまで準備をしたみこし、大うちわ、またい、そしてデコマス。参観者一人ひとりに、肥料の空き袋で作ったちゃんちゃんこがプレゼントされた。

子どもたちの自治組織である「おがわっ子独立国」(児童会)は、環境問題に取り組み、WWFの会員としても活動をしている。

フェスティバルは、その独立国のメイン的行事で、日常の学習・生活の集大成として位置づけられている。

エネルギーッシュなおがわっ子の姿をみることができた。



おがわっ子フェスティバル' 91

◆鳳中学校（横手市） 10月18日（金）

中学校で行なわれた研究発表会の一つ。

ここで特に注目されたのは、ワーク・スペースを使っての数学科のチーム・ティーチングの授業であった。個別指導になった部分を3人の教師で指導にあたっていた。到達度によるグループ分けを行っているが、コンピュータやテレビなども使い、適性に応じた指導を行っていた。

また、理科では廊下にまで実験装置を設定し、課題別学習が行われていた。

他の教科の実践にもそれぞれ工夫されたところが多くあり、400名近い参加者の共感をさそった。

◆日枝小学校（横浜市） 11月1日（金）

韓国私立小学校長会のメンバー40名と共に、研究発表会に参加した。

廊下部分と特別教室や、図書室の間の壁を取り払い、オープン・スペースを構成しているユニークな学校である。部分的な改修としてもモデル・ケースである。

また、生活科を中心に、3年以上にも総合学習を編成し、実践していることも特色である。所狭しこそばかりに展開される授業は、興味を引くものばかりであった。

◆朝日ヶ丘小学校（郡山市） 11月21日（木）

数年前開校した折に行き、話をさせていただいている。その後、どうなったのかなと思っていたところ、新しい校長のもとに研究会を開くということで、喜んで行かせていただいた。期待にたがわぬ立派な研究実践で、400名近い参加者を魅了した。

◆原道小学校（埼玉県）

11月22日（金）

大利根町（栗橋駅）は、上野から45分でつく近い所である。町はこの2、3年に3校ほどのオープン・スクールを建てている。原道小学校は、その一つである。オープン・スペースとコンピュータをうまく組み合わせて、算数科の研究にのぞんできている。生活科や社会科などにも、今後は研究を開拓していくことである。

◆松阪市立第一小学校（三重県） 11月28日（木）

「ひとりひとりの個性・能力を伸ばす学習指導のあり方」を研究主題に、生活科では子どもの興味・関心、地域性を重視した課題別の体験活動が、理科では（3～6学年）、問題解決の過程を基本にしながら、一斉一 個別（自由進度学習、順序選択学習）形態による学習活動が公開された。

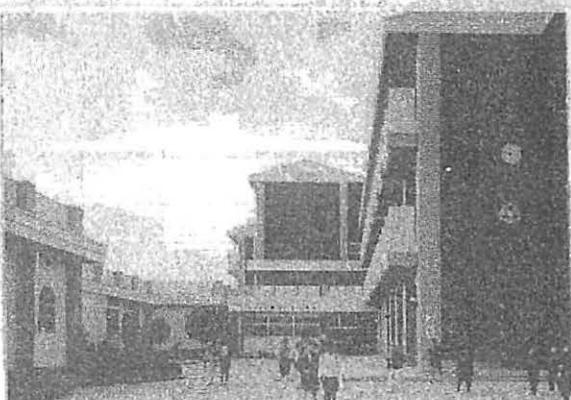
約350名の県内外からの出席者に囲まれ、全体会・分科会も盛会であった。なお、第27回三重県小学校理科教育研究大会も同時開催された。

◆芦野小学校（釧路市）

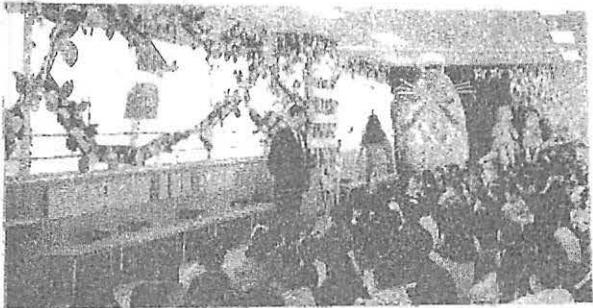
11月28日（木）

北海道には、帯広市の花園小学校のように古くからのオープン・スクールがいくつある。

芦野小学校は、3年前に開校した新しいオープン・スクールの一つであるが、空知地方や北見市、帯広市などから400名近い参加者があったことは印象的であった。実践の特色は、徹底したチーム・ティーチングであり、なにより先生方が仲良く研究し、授業を行っている姿がうれしかった。私たちの会に参加していただくと同時に、道北地方のモデル校になってほしい。



朝日ヶ丘小学校



芦野小学校にて

◆精華小学校（東京都）

11月29日（金）

この1、2年、東京にあるオープン・スクールの発表がなく淋しい気がしていたのであるが、今回、精華小学校で全国から300名を越える参加者を集めて研究発表会が開かれ、大変嬉しく思われた。研究内容も一段と深まり、「自ら学ぶ子を育てる学習環境づくり」であった。教師中心の指導では「自ら学ぶ子」は育たないというのが私たちの主張である。子どもたちが自ら働きかける学習環境を用意することによって、「自ら学ぶ力」を育てたいのである。教師の役割は、子どもたちの学習活動を支援することにある。この原理的な転換なしに、オープン・スクールは成立しない。それにしても、嬉しい一日であった。

◆久原小学校（福岡県）

11月29日（金）

「自己教育力の育成をめざす教育課程の運用に関する研究」を主題に、契約学習（チャレンジタイム）、総合学習（生活科）、単元内自由進度学習（理科、体育、算数）、及び無学年制治療学習（文字と数のはげみ学習）が授業公開された。県内外から約200名の出席者があった。

生活科と単元内自由進度学習に分かれた分科会では、その意義、進め方等をめぐって白熱した議論が展開された。

本年度の会費（個人3000円、団体5000円）

未納の方は、至急納入願います。

口座番号：東京0-194394

加入者名 全国個性化教育研究連盟

事務局だより

- 長い間の本連盟の懸案事項であり願いだった「個性化教育ハンドブック」と「日本のオープンスクール・個性化教育実践校ガイドブック」が、やっと印刷発行の運びとなりました。

全国の会員の方々に執筆をお願いいたしましたところ、たくさんの会員の方々から、承諾のお返事をいただきました。ありがとうございました。共に、年明けには発行の予定です。

「個性化教育ハンドブック」は、学陽書房から発刊されます。「ガイドブック」は、本連盟会誌の臨時増刊号として発行することになります。発行の際にはご案内いたしますので、ご購読くださいますようお願いいたします。

- この秋、韓国の先生が12名、本連盟に加入されました。今まで、国際会員は韓國の方2名と海外の日本人学校の方や留学されている方の3名だけでした。韓国では、独自の研究会を持つなどの研究が始まっており、韓國の会員の方も増え、海外にも広がる個性化教育の大きな流れを感じます。

尚、新年1月13日～16日に、韓国オープン教育研究会の方々が来日し、東京・神奈川にあるオープン・スクールを参観の予定です。

- 名簿の理事の欄にミスがございました。

理事に次の方を加えてください。

北海道 小川 清志

ここにお詫びして、訂正させていただきます。

（事務局への問い合わせ・連絡先）

〒114 東京都北区赤羽南1-16-2-504

庶務部長 佐久間茂和

☎ 03-3903-4780

全国個性化教育研究連盟会報 第20号

平成3年12月25日発行

編集責任者 事務局長 高浦勝義

編集 広報部 五十子晴美